

1月1日 神の母聖マリア

民 6:22～27 ガラ 4:4～7 ルカ 2:16～21

1. ルカ

v.21 「八日たって、割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。」

“聖書を学ぶ”ということ、だれかから“要するに聖書はこう言っているのです”という話を聞いて、そこで語られている“神のことは”を“分かりやすい簡単な思考パターン”に置き換えること、だと思っている人が多いようです。自分で聖書を読むという苦勞をしなくても、分かったような気分させてくれるのが良い教師、良い参考書だという訳です。

そういう人たちにとっては、聖書に出てくる“律法”などというものは、古い時代のユダヤ人の慣習であって、現代の私たちにとっては“過ぎ去ったもの”として無視されます。現代には現代のトレンドがあるように、幼子が生まれて八日目に割礼を受けてイエスと名付けられたというのも、当時の慣習によることであつたと片付けられてしまうのです。

しかし、救済史は神の支配の歴史であって、イエスの誕生を救済史の出来事として理解することが、私たちキリスト者にとっては、“神のことは”を聞く出発点になります。間違つて別の電車に乗ると、違うところに連れて行かれてしまうのと同じです。

マリアとヨセフも、幼子イエスも、救済史の中の登場人物でありました。救済史の主演は神であつて、人間ではありません。救済史の目標は「天の故郷」(ヘブ 11:16)、「新しい天と新しい地」(黙 21:1)であります。「恵み豊かな神よ、すべてはあなたによって始まり、あなたのうちに完成します。聖母の中に始められた救いのわざを祝うわたしたちが、その完成の喜びにもあずかることができますように。」(今朝の奉納祈願)
「おとめマリアを御子の母、教会の母として仰ぐわたしたちが、永遠のいのちを受けることができますように。」(今朝の拝領祈願)

2. ガラ

w.4 「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。」

十字架を理解する、キリストの贖いを理解することこそは、カトリック教会の存立の基礎であつて、ごく初期の頃から十字架は教会のシンボルでありました。今年は“信仰年”でありますから、多くのカトリックの子らが「カトリック教会のカテキズム」を学習するようにと期待されています。その第1編／第2部／第2章／第4項／第2節の2「神の救いの計画におけるキリストのあがないの死」(pp.180-182)を、よく読んで十分に咀嚼しましょう。それは私たちのマリア崇敬が“空しい軽信”とならないためです(教会憲章 66-67)。

神の子イエスが“律法の下に生まれた者となる”ために、おとめマリアは用いられました。マリア自身が“律法の下にある罪人”(ガラ3:22-23)でなかったら、その子であるイエスが十字架の死によって“自ら呪いとなって、わたしたちを律法ののろいから贖い出す”(ガラ3:13)などということは起こり得ませんでした。「つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。」(ロマ8:3) 私たちは皆、イエス・キリストによる罪の赦しを必要としているのです。そしてマリアは、そのような教会の“卓越した象型”(教会憲章65)であります。

3. 民

v.27 「彼らがわたしの名をイスラエルの人々の上に置くとき、わたしは彼らを祝福するであろう。」

“祝福は神から来る”ということのを正しく理解するなら、教会は多くの迷信や軽信を退けることができます。それは現状のカトリック信仰を矯正するのに、有益なことです。

しかし同時に、神は御自分の祝福を民の上に置くために、その器として特定の人々を用いられます。「アロンとその子ら」(v.23)の役割は重大でありました。「教会は使徒と預言者という土台の上に建てられています。」(エフェ2:20) 「だれもほかの土台を据えることはできません。」(Iコリ3:11) 神が祝福を与えられるのであって、司教や司祭に祝福を信者に施与する能力があるわけではありません。しかも神は、司教と司祭を御自分の器としてお用いになるのです。

そのように、おとめマリアも神の器として用いられ、「神の子の母になる最高の役割と尊厳を授けられた」(教会憲章53)のでした。「教会はこのような従属的なマリアの役割をためらわず宣言し、絶えずこれを経験し、なおこの母の保護にささえられて、仲介者・救い主にいっそう親密に一致するよう、これを信者の心に勧める。」(教会憲章62) 「主はあなたを選び、祝福し、……」(旧 聖母マリアへの祈り)。

アーメン、ハレルヤ。

1月6日 主の公現

イザ 60:1～6 エフェ 3:2～6 マタ 2:1～12

1. マタ

v.10 「学者たちはその星を見て喜びにあふれた。」

主の公現の祭日は伝統的に、神が星の導きによって救い主の誕生を諸国の民に示されたことを記念する日であります。しばしばこの諸国の民という呼称は、キリスト教的西欧から見て外の世界、すなわち未開な外国の民を連想させて来ましたが、むしろこの物語りを産み出した初期の教会が、この“喜び”を自らの救いの喜びとして理解していたという、教会の伝統にこそ私たちは目を向けたいと思います。今朝の奉納祈願は「教会の供えものを顧みてください」であり、拝領祈願は「いつもあなたの光でわたしたちを導いてください」であります。私たちは自らをこの学者たちに置き換えて、今日、喜ぶのです。

言うまでもなく現代の私たちにとってこの“星”は、啓示の源泉である“聖伝と聖書”に他なりません。学者たちがその星の導きによって「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた」(v.11)とある通り、教会は“ともにささげるミサ”によって「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わり」(II コリ 13:13)を体験するのです。ただしこのキリストはもはや幼子ではなくて、「死者の中からの復活によって力ある神の子と定められ」(ロマ 1:4)、「人々の罪を清められた後、天の高いところにおられる大いなる方の右の座にお着きになった」(ヘブ 1:3)方であり、そこから救い主として再び来られるのを(フィリ 3:20)私たちが待ち望んでいる(I テサ 1:10)キリストです。

「この御子において、その血によって贖われ、罪を赦された」(エフェ 1:7)私たちキリスト者にとって、“聖書を学ぶ”ということは、使徒たちの宣教した福音によって神の啓示を聞き、「神の栄光にあずかる希望」(ロマ 5:2)に「しっかりと立つ」(フィリ 1:27、I テサ 3:8/フランシスコ会訳)ためです。正しい“聖書の学び”は、決して“ためになるお話し”や“創作的説教”で置き換えられてはならないものなのです。

2. エフェ

w.5-6 「この計画は、…… 今や“霊”によって、キリストの聖なる使徒たちや預言者たちに啓示されました。すなわち、異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをわたしたち(ユダヤ人)と一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者となるということです。」

聖なる者たち(1:18/教会)が「御国を受け継ぐ」(1:14)という神の「秘められた計画」(1:9, 3:3,9)を告げ知らせる福音(3:7-9)こそが、啓示の内容であります。

皮肉なことに、“聖書は永遠のベストセラー”などと言われるほどに、その出版は莫大な数で行われていながら、同時にこれほど読まれずに“積ん読”されて来た書物はありませんでした。たまたま“わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来しました”(マタ 2:2)などと言う挨拶を聞くと、あわてて専門家た

ちを集めて、“その秘められた計画とは、聖書でどういうことになっているのか”と問いただすほどに、“人々の心には覆いがかかっている”(II コリ3:15)のです。

しかし感謝すべきことに教会は典礼暦によって、聖伝と聖書を通して啓示に人々の心が向けられるようにと、主の公現の祭日を与えられて来ました。「しかし、主の方に向き直れば、覆いは取り去られます。」(II コリ3:15) 教会はこの日に、その日課の朗読によって、“その星を見て喜びにあふれ、家に入ってみる”(マタ2:10-11)ようにと招かれます。実に教会は、啓示の証言者である「使徒と預言者という土台の上に建てられている」(2:20)のです。「これは、神の豊かな恵みによるものです。神はこの恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。」(1:7-9)

3. イザ

v.1 「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。」

エルサレムは再建され、第二神殿の完成を期待しつつ、幾度かの幻滅と懐疑にもかかわらず、第三イザヤは神に対する強いあこがれを貫いた預言者でありました。このテキストは彼の初期の預言であり、それはやがて新しい天と新しい地がエルサレムを中心として創造されるという大いなる終末的展望(65:17-25)へと進んで行きます。

後になって、「この計画は、キリスト以前の時代には人の子らに知らされていませんでした」(エフェ3:5)と言われますが、しかし神の救済史は常に“待望”として、“あこがれ”として、その実現が語られることによって、イスラエルの信仰の目標でありました。神の子の第一の来臨によってイザヤの預言の一部が実現し、教会は今や終末におけるキリストの第二の来臨への信仰によって歩んでいます。それは教会が聖伝と聖書を通して“その方の星を見ている”からです。「東方で見た星が先立って進み、……」(マタ1:9)

アーメン、ハレルヤ。

1月13日 主の洗礼

イザ 40:1~11 テト 2:11~3:7 ルカ 3:15-16,21-22

1. ルカ

v.16 「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。」

カトリック教会は、洗礼、堅信、聖体の三つの秘跡を別々に切り離さないで、これを一つに組み合わせられた“キリスト教入信の秘跡”として理解しています(カトリック教会のカテキズム 1212,1285)。

ところが一般には、初めに幼児洗礼があって、子供がある年令に達するとカテケシス(信仰教育)が行われて堅信の秘跡が授けられ、こうして聖体を受ける一人前の信者になるというふうに、実際には考えられて来ました。このような方式には、既に数百年に及ぶ教会の慣習が背景にあって、キリスト教国ではそれらが人生の通過点のようなものとして受け入れられて来たのです。しかし、洗礼が堅信の、堅信が聖体の準備段階のように考えられて、順を追って通過し、成人した信者にとってはもう卒業してしまった単なる経歴として、今や過去の思い出に過ぎなくなってしまうことに、カトリック教会のカテキズムはここで異議を唱えているように思われます。

同様に、洗礼者ヨハネはしばしば、単に主役であるイエスの登場を準備する前座に過ぎないように考えられて来ました。例えばヨハネ福音書の中には、そのような理解を示唆する記述があります(1:8, 3:30)。しかし新約聖書全体を見渡すと、洗礼者ヨハネはイエス・キリストの福音自体の一部をなしているのが分かります(マコ 1:1, 使 1:21-22)。救い主イエス・キリストによる“聖霊と火の洗礼”に対して受洗者を準備し、来るべき怒りの裁きから守る“水の洗礼”を、彼は宣べ伝えました。原始教会はこの洗礼を、それに新しい内容を加味はしたが、ヨハネから受け継ぎました。イエスが祭司長や律法学者に、「ヨハネの洗礼は、天からのものだったか、それとも、人からのものだったか」(20:4)と尋ねられたとき、これを福音の出来事の一部と認めておられたのは明らかです。

福音書はこの場面では、なぜ罪のないイエスが悔い改めの洗礼を受けに来られたのかには答えず、ただイエスの上に聖霊が降って、これを“主の僕なるメシア”として即位させたことだけを証言しています。

2. テト

v.14 「キリストがわたしたちのために御自身を献げられたのは、わたしたちをあらゆる不法から贖い出し、良い行いに熱心な民を御自分のものとして清めるためだったのです。」

1月1日の学びでイエスの受肉の秘義について、イエスが“律法の下に生まれた者となる”ために、おとめマリアは用いられましたと書きましたが、同様に主の洗礼は“世の審判者である方が罪人の中に立つ”(ロマ 8:3, II コリ 5:21)象徴的出来事でありました。「そして、十字架にかかって自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです」(I ペ

ト2:24)という信仰に固く立つことが、ここで言われている「良い行い」であります。

“罪”というキリスト教用語が、聖書が語っているような“神に対する”意味では理解されず、“社会的な不法”、あるいは“人間関係の中での不正”として捉えられるようになり、更にそのような人間中心の観点から聖書を解釈するということが、現代の教会では久しく既成事実化しています。洗礼は、人間がどのように考え方を改めるかの問題として捉えられ、“新しく生まれる”(v.5)ということもそのような関連で理解されています。そこではキリスト者の使命は“よりよい人間、よりよい世界を作ること”であって、「祝福に満ちた希望、救い主イエス・キリストの栄光の現れを待ち望む」(v.13)ことではありません。

しかし主の洗礼の祝日は、現代の教会が「キリストが自らその身にわたしたちの罪を担ってくださった」(1ペト2:24)事実により再び目覚めることを、呼びかけているのです。

3. イザ

v.1 「慰めよ、わたしの民を慰めよと、あなたたちの神は言われる。」

自分たちは、自分たちの時代は、そして自分たちの世界は「罪のすべてに倍する報いを主の御手から受けた」(V.2)と、本当にへりくだって認める“信仰の人”だけが、この“神から訪れる慰め”の知らせを確かに聞くのです。自らと自らの民の罪を本当に知っているでなければ、だれも「良い知らせをシオンに伝える者」(V.9)にはなれないでしょう。

私たちが受けた洗礼は、「罪の赦しを得させる悔い改めの洗礼」(ルカ3:3)であったことを、もう一度しっかりと学び直そうではありませんか。主イエス・キリストの福音にとって、ヨハネの水による洗礼は、その必須の一部でありました。現代の教会にとっても、“自分の、自分たちの時代の、そして自分たちの世界の罪を本当に認める悔い改め”が、「自らその身にわたしたちの罪を担ってくださった」(1ペト2:24)主の洗礼から真の慰めを受けるためには必須なのです。

「しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。」(ルカ12:50)

「彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」(53:5、1ペト2:24)

アーメン、ハレルヤ。

1月20日 年間第2主日

イザ 62:1～5 1コリ 12:4～11 ヨハ 2:1～11

1. ヨハ

v.4 「わたしの時はまだ来ていません。」

“イエスの時”という言葉は、ヨハネ福音書では彼の十字架上の死と復活、および昇天を指して用いられていることに、先ず注目しましょう(7:30, 8:20, 12:23,27, 13:1, 17:1)。すなわち、この“カナでの婚礼”の物語りはただの奇跡物語りとしてではなくて、教会におけるキリストの死と復活の記念祭儀であるミサ(ミサ典礼書の総則/前文2)を説明するために、ここに置かれているのです。このv.4を単純に、“あと一時間後には・・・”などと考えてしまうと、何も理解出来なくなってしまう。

共観福音書では“婚宴”は神の国の比喻に用いられ(マタ 22:1-14, 25:1-13)、イエスと一緒にいる弟子たちは“婚礼の客”に警えられています(ルカ 5:34)。さらに重要なのは”ぶどう酒と革袋の警え”が、新しい時代と古い時代の対比に使われていることです(ルカ 5:37-38)。このように「ぶどう酒に変わった水」(v.9)が、聖体の聖なる秘義すなわち教会のミサを想起するように、この物語りは構成されているのです。典礼憲章(2)はミサの祭儀を説明して、「そこでは人間的なものが神的なものに、見えるものが見えないものに、活動が観想に、そして現在がわれわれの求める未来の国に向けられ、従属している」と述べています。

今やイエス・キリストは全宇宙の王となり(マタ 28:18, エフェ 1:20-23, フィリ 2:9-11)、生きている者と死んだ者を裁くために来られる(II テモ 4:1)救い主となられたことを、弟子たちは信じました(v.11)。感謝の典礼が“しるし”と呼ばれるのは、恐らくこのv.11に由来しています。

ちなみに、カトリック教会のミサは“ことばの典礼”と“感謝の典礼”から成り立っていて(総則 8)、それゆえに“ことばとしるしによる神奉仕(Gottesdienst)”とも呼ばれているのです。

2. 1コリ

v.7 「一人一人に“霊”の働きが現れるのは、(教会)全体の益となるためです。」

使徒パウロがこの“霊的な賜物”についての説明を、ミサの祭儀についての一連の話の続きとして述べていることを、私たちは見落としてはなりません。と言うのは、ともすると世間で言うタレントのことであるように、このテキストを考えてしまう傾向が、教会でも見られるからです。

霊的な賜物は先ず第一に、私たちが「キリストの体を造り上げていく」(エフェ 4:12)、あるいは「あなたが自身が生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられる」(I ペト 2:5)のために与えられるものなのです。教会の対外的な活動に関わる賜物は、その延長線上で理解されなければなりません。カトリック教会は次のように教えています。「そして、他の聖なる行為とキリスト者の生活のすべての行いはミサに結ばれ、

ミサから流れ出、ミサに向かって秩序づけられている。」(総則1、典礼憲章10参照)

以前に私は、“聖書を学ぶことは、ミサを考えることです”と発言したことがありますが、そのときには一部の信者の方々から、まるで私がカトリック教会のミサを非難しようとしているかのように受け取られて、とても悲しく感じたのを覚えています。また教会ではいろいろな種類の活動が常時行われていますが、それらがミサ(感謝の祭儀)と結びついていない、単なる“いろいろな活動”に過ぎないという実状を、私は深く憂えています。

一方プロテスタントでは、礼拝そのものが一種の娯楽や親睦会のようなものになってしまう教会があって、そこでは“キリストの死と復活の記念祭儀”などという理解がほとんど忘れられているのを見かけます。「民は座って飲み食いし、立っては戯れた。」(出32:6)しかし、それを非難したりあざ笑ったりする資格が現状のカトリック教会にあるなどとは、残念ながら私には見えないのです。

3. イザ

V.1 「シオンのために、わたしは決して口を閉ざさず、エルサレムのために、わたしは決して黙さない。彼女の正しさが光と輝き出で、彼女の救いが松明のように燃え上がるまで。」

恐らく第二神殿が完成して(B.C.516)間もなくの頃のものと思われる60〜62章には、現実と理想の不思議に入り交じた調子の高い預言の数々が集められています。現実のエルサレムは決して“正しくはなく”(w.1-2)、神殿の祭儀はとても“輝かしい冠とは言えない”(v.3)状態でありましたが、それにもかかわらず預言者はエルサレムを、つまり主の民をヤーウェが再建される(v.5)という希望を語って止みませんでした。この、神による救いの完成を確信する希望が、決して黙することなく語られているということに、主の民イスラエルの存在が依存していたと言うのは行き過ぎでしょうか。

現代のカトリック教会も、ミサによって、ことばとしるしによって、確かに生きて存続しているのです。“カトリック教会のカテキズム”の助けによって、また“ミサ典礼書の総則”や“第二バチカン公会議の公文書集”の導きによって、全世界のカトリック教会は神のことばを確かに聞かされており、それは決して黙することがありません。

「聖言(みことば)うちひらくれば光をはなちて、愚かなるものをさとからしむ。」(詩119:130/文語訳)

「御言葉が開かれると光が射出で、無知な者にも理解を与えます。」(同/新共同訳)

アーメン、ハレルヤ。

1月27日 年間第3主日

ネへ 8:2～10 1コリ 12:12～30 ルカ 1:1-4, 4:14-21

1. ルカ

vv.20-21 「イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。そこでイエスは、“この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した”と話し始められた。」

聖書朗読が行われ、多くの場合そこで説教も行われる“朗読台”について、ミサ典礼書の総則(272)は、「それは、ことばの典礼の間、信者の注意が自然に向けられる場所でなければならない」と述べています。

朗読が終わると、人々の目がイエスに注がれて、その口から出る恵み深い言葉すなわち説教に関心が集中した様子を、ルカ福音書はここで描いています。人々がイエスの説教に「非常に驚いた」(4:32)と伝えられている(1:2)ことを、読者の目に浮かぶように語る、これは見事なルカの話法と言って良いでしょう。

「キリストは、常に自分の教会とともに、特に典礼行為に現存している。キリストはミサの犠牲のうちに現存している。…… 聖書が教会で読まれるとき、キリスト自身が語るのである。」(典礼憲章 7) ミサの中で聖書が朗読され、それを確かに私たちが聞くと、神のことばは出来事になるという体験を、私たちはこれまでどの程度ほんとうに実感して来ているでしょうか。

教会で、特にミサにおいて、聖書が朗読あるいは朗唱されるという慣習が古くからあって、とても大切にされて来ました。地域や教派によってその形式は多様であっても、聖書の言葉を会衆が耳にしたとき、神のことばが出来事になるという体験を、教会は持ち続けて来たのです。ですから一部の私訳本を除いて、従来の日本語聖書がすべて、教会での朗読を前提にして翻訳出版されて来たのもそのためです。

司祭や牧師による説教が聖書を神のことばに、あるいは神のことばを出来事にするというふうを考える人たちもいます。それも一面の真理を含んでいると言えなくはありません。しかし行き過ぎると、聖書朗読が単なる説教の種(利用可能な材料)に利用されるだけで、人間の説教が主役の座を奪ってしまって、キリスト御自身は沈黙するということが起こります。それは現代の多くの教会で実際に起こっていることです。

カトリック浜松教会のミサでも、奉仕者による聖書朗読がもう少し大切にされる、つまりよく準備されたよい朗読が期待されるのと同時に、会衆自身がその朗読から神のことばを耳にしようとして集中する、聞く姿勢の真剣さというものが望まれます。

2. ネへ

v.3 「民は皆、その律法の書に耳を傾けた。」

説教とは何でしょうか。典礼憲章(52)はこれを定義して、「典礼の暦に従って、聖書に基づいて、信仰の秘義とキリスト教生活の諸原則を説明する説教……」と述べています。

祭司エズラの律法朗読に伴って行われたレビ人の説教が、どのような性格のものであったかをネヘミヤ記は伝えています。

v.8 「彼らは神の律法の書を翻訳し、意味を明らかにしながら読み上げたので、人々はその朗読を理解した。」

律法の書(旧約聖書)はヘブライ語で書かれており、それは既に死語になっていて、当時のユダヤ人の日常語はアラム語でありましたから、その律法の書を理解出来るように翻訳し、説明するのが説教の役目でありました。聖書に何かを付け加えたり、聖書からヒントを得て“役に立つお話し”を創作するなどというものでは、決してありませんでした。

主日のミサで、確かに説教は大切なものですが、その目的は何よりも、私たちが当日の聖書朗読を理解するのを助けることでなければなりません。私たちが正しく聖書の言葉を耳にする(聴き取る)とき、神のこゝろが出来事になるということが起こるのです。

3.1 コリ

v.15 「足が、“わたしは手でないから、体の一部ではない”と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。」

教会のことは神父さまにお委せして、信者は神父さまの言いなりになっていけばよいという安易な考え方が、かなり普及しています。私は元は牧師でしたので、プロテスタントの教会では牧師が交代すると、ほとんど常に全く別の教会に変身するのが常であるという現実を、たくさん見て来ました。カトリック教会でも、これと同じ傾向があるのです。

「典礼行為は、個人的行為ではなく、教会の祭儀である。」(典礼憲章 26) “私は司祭ではないから、ミサのことには口出ししない”と言ったところで、信徒が教会の一部でなくなることはありません。もしキリストの体である教会の“かけがえのない一部”であるなら、ミサを司祭個人の行為のように考えて、ただ傍観していることは許されないのです。

私たち一人一人が聖書の言葉に耳を傾け、もっと大きな賜物(12:31)、すなわち教会を造り上げる愛を主から受けることが出来ますように。それを豊かに受けることが出来ますように。(14:4,5,12 参照)

アーメン、ハレルヤ。